



下関西高等学校 進路だより

令和5年6月号 進路指導部

良心を束ねて河となす

以前、進路だよりで脳神経外科医の北川緑野医師のことを紹介しました。その時は「自分の責任で患者を死なせてしまうかもしれないと思うから恐怖心が湧いて手術中に手が震える。余計なことは考えず目の前のことに集中して取り組む。実は手先の器用さは問題ではない。それよりも手先を含めた自分の行動を制御する心のありようが重要である。また、脳外科医は手術中に必ず岐路に立ち、そのたびに選択することを迫られる。だから、脳外科医には安易で簡単な道を選んでもらっては困る。道に迷い、つらいと思ったら、よりつらいほうへ進もう。精神論は今どき流行らないといったところで、結局、我々の心の持ちようでやることは変わる。」という北川先生のメッセージを紹介しました。

それに続き、今回もある医師の方を紹介したいと思いますが、その人は医師としての説得力はもちろんあったのですが、それ以上に土木エンジニアとしての活躍が目覚ましかった医師で中村哲先生といいます。中村先生の存在を知っている人はかなりいるのではないかと推測していますが、残念ながら彼は現在、この世に存在していません。理由は2019年12月、アフガニスタンの東部ナンガルハル州の州都ジャラーラーバードにおいて、車で移動中に何者かに銃撃を受け、運転手や警備員5名とともに亡くなられたからです。まず、先生の功績としてパキスタン、アフガニスタンで35年にわたり医療活動を続けたということが挙げられますが、加えて、干ばつによる飢餓で人々の命が危機に瀕したということで用水路の建設に乗り出し、8年越しで思い描いた総延長27kmにわたる9つの堰を完成させ、荒れ果てた土地に緑を戻したことの方が私にはインパクトがあります。中村先生は最初、小説家を目指されていたようですが、中学時代に目の不自由な牧師さんと出会い、その献身的な姿に触れて世のため人のために直接力になれるものは何かと探して医師を目指されるようになり、1966年に1年浪人の後、九州大学医学部に進学されました。人の心に向き合いたいと精神科医の道に進み大牟田労災病院で医師としてのキャリアをスタートされましたが、時は高度経済成長期、医療業界も変化を迎え、患者を1分でも長生きさせることが善という風潮が蔓延していたようです。そんな、人間の身体を壊れた道具を治すように患者を扱う医療現場に嫌気がさし、31歳の時にパキスタン、アフガニスタン国境のヒンドークシ山脈の登山隊に医師として同行されたことをきっかけに、海外の医療に関わられるようになりました。そして、その4年後、ペシャワールに赴任されます。先生の現地での活動を支える募金は同級生などが設立したNGOの「ペシャワールの会」が行ってきましたが、会が長きにわたり維持されてきたのは先生の懐の深い人間力によるものでした。現地での活動は当初から壁にぶち当たりまくったようですが、立ちはだかった最初の壁は、手当が遅れると麻痺や変形により歩いたり、モノをつかんだりという生活に欠かせない機能が奪われるハンセン病でした。これは、自給自足中心の途上国では致命的な病です。それに対して先生は内科や外科の医術を習得され、患者がもとの生活に戻れるようにすることに時間を砕き、特に一人一人の暮らしの様子まで丁寧に聞き取り、リハビリなどを通して徹底的に向き合いました。さらに、お金のない人が受けられない医療があることに怒りを覚え、医療の届かない山岳地帯への巡回診療にも乗り出し、10年かけて寄付金で無医村の山岳地域に5つの診療所と拠点病院を設立。年間15万人を超える医療を可能にされました。ところが、2000年にアフガニスタンを大干ばつが襲い、水不足で人々の

(裏面へつづく)

命が危機にさらされると活動の中心を医師から土木エンジニアにシフトしていきます。理由は当地の干ばつによる水不足により、子供や高齢者などの弱い者を栄養失調や感染症が襲い、医療だけでは救えないことを自覚されたからです。「100の診療所より1本の用水路がここには必要だ!」と悟り、自分達で食べることができるようにと用水路の水を地元のクナル川から引くことを決意されます。無謀な計画でしたが、先生はここでも1から土木工学を学び、自ら設計図を引き、2003年から医療スタッフとともに前代未聞の工事を開始されます。経験者は0、先生も56歳と若くはありませんでしたが、覚悟を示すように自ら先頭に立って工事を始め、石を組み、機材を動かされたようです。生きるために傭兵やゲリラとなっていた人も村に戻り、武器をショベルに持ち替え、アメリカ軍の空爆の中でも工事は継続されたそうです。もちろん、工事は医療以上に壁だらけで、特に用水路の取水溝を建設している時、近代工法の基本に従って堤防を川の流れに対して直角に土砂を積み上げようとしたが、川の流れが予想以上に強くて土砂が積みあがらずに流されていったことは流石にショックだったようです。それに対しては、故郷の筑後川にある山田堰にヒントを見出されました。本来は川の流れに対して垂直に堰をきっておくのが基本ですが、故郷の先人に習って斜めに巨石を配置した結果、水の圧力が減り、やっと石が積みあがり、8年がかりで待望の用水路が完成しました。ところが、2010年夏に100年に1度の洪水が襲い、今度は水門が破壊され用水路が土砂で埋まり、絶望的な状況になったそうです。先生は悩んだ末、ここでは強い堰を作って自然と戦うことではなく自然と折り合っていくことが必要だと思い始めます。そして、筑後川に何度も足を運び観察し続けたところ、よく見ると堰は斜めの直線ではなく、斜めのカーブによって水の流れが中央に集められ洪水時に本流に向かうようになっていたことに気づかれます。すぐに、ペシャワールに戻り試行錯誤の末、2019年4月に新しい堰が完成されました。

さあ、これから100本に向けてと意気込んだ矢先、凶弾に倒れました。土地の利権争いに巻き込まれたなど憶測は色々ありますが、真相はいまだ不明です。以前から多くの人に裏切られ、車を盗まれたりなどひどい目に合われていたようですが、そこでも先生は感情的になるのではなくその原因を探究し、改善しながら前に進む人だったようです。だからこそ、多くの人が中村先生についていったのでしょう。

私は8年ほど前に中村先生のことを初めて知り、個人的に注目をしていました。「なぜ、そこまで他人の為に活動できるのか?」など、直接お会いして質問したいことが山ほどありました。実はそのチャンスが2019年11月16日に1度だけ訪れました。下関で講演会が開催されたのです。私は行こうと思っていたのですが、ちょうど仕事と重なり行けませんでした。「先生は各地で講演会をされている。次のチャンスを待とう」と気持ちを切り替えましたが、結局、この講演会が生前最後となってしまいました。「こういった建設事業は、医師の仕事ではないかもしれないけど、これは平和運動ではなく医療の延長だと思ってやってきた」「温暖化も看過できる問題ではなく、今後も緑を増やす活動をしていきたい。そのためには、どんな困難でも乗り越えていくつもりだ」「我々はあらゆる立場を超えて存在する人間の良心を集めて氷河となし、確実に困難を打ち砕き、かつ何かを築いてゆく者でありたいと、心底願っている」など多くの言葉を残された偉人ですが、自分の命が狙われていることも予感されていたようでした。しかし、先生は灌漑事業に命を懸けていて、「途中で投げ出したくない、自分は絶対に逃げない」と、あえてふだんどおりの生活を送っていたようです。事件当日も中村さんは、襲撃の被害をいちばん受けやすい助手席に座っていたそうです。「万一のときに殺されるのは自分だけでいい」という、覚悟の表われだったかもしれません。彼の紹介は以上としますが、紙面が全然足りません。是非、医学科志望の生徒に限らず、中村先生を探究してみてください。なお、昨年10本目の用水路を現地スタッフだけで完成させたそうです。

(文責・進路指導部・松村)